

調査研究報告書

高齢者のための厨房機器の
設計に関する基礎的研究

梁瀬度子・久保博子

(奈良女子大学生生活環境学部)

1994

財団法人 姿勢研究所

第1章 はじめに

わが国の高齢化がこれまでに辿ってきた道を振り返ると、1950年を境としてそれまで50歳代であった平均寿命が60歳を越えるようになり、その後40年余りの間に加速度的に伸び、国際的に比較しても群を抜いてトップの座を占めている。また、わが国の65歳以上の人口割合が全人口の7%以上を占めて、いわゆる高齢化社会となったのは1970年であるが、20年後の1990年に行われた国勢調査では12.1%に達し、現在ではすでに13%を超えて着実に増え続けており、さらに2020年には25%を超えてピークを迎え、最も高齢化の進んだ国となることが予測されている。

このようなわが国の高齢化の特徴から、高齢化社会に対応した社会システムの体系的整備が緊急かつ迅速に行われる必要性が示唆されている。加えて、少子化の進展に伴う子供への負担の軽減から、第二の人生ともいべき定年後の20年にもわたる長い期間を、いかに健康で充実して送るか、ということが問題となっている。

1981年の国際障害者年を契機に、ノーマライゼーション、インテグレーションの思想が普及してきているが、この基本的理念は、単に高齢者や障害者を弱者として保護するのではなく、自己の持てる機能を出せるだけ長く維持させ、住み慣れた住居、地域での生活を安全に自立して行えるための支援としての機器開発や環境整備を行うことにある。

近年、高齢化対応としての機器の開発も進められつつあるが、高齢者に関する基礎的研究資料がはなはだ乏しいことから、高齢者の生理的、心理的機能を充分把握し得ないまま製品化される傾向があり、高齢者にとって使いづらいものや使いこなせない機器が多いのが現状である。

そこで、日常生活の中で頻繁に使う台所機器の中からガスレンジをとりあげ、その操作性に関する実験を行い高齢者の作業姿勢や作業特性を把握し、使いづらさの要因を探ることにより、高齢者に優しい生活機器の開発のための基本原則を提案することを試みた。